

益川敏英

京都産業大学教授／ノーベル物理学賞受賞

国境なき時代の若者へ、 好奇心を失わずに

学問——ことに自然科学の分野では、国境なんて存在しません。

理論物理学の世界では、理論を検証するための実験施設がどんどん大規模になり、1950年代あたりからヨーロッパでは各国共同の施設が作られてきました。アメリカにも世界の学者が集まるようになりました。私にも海外で研究するチャンスはありました。選択しませんでした。それは、理論物理は日本でも十分に

できるといふ気持ちと、何よりも研究者たちとの日常生活、それも、微妙なコミュニケーションを大切にしたいと思つたからです。

私が学んだ名古屋大学の坂田昌一先生の研究室は、30人ぐらいでいつも議論していました。京都大学も同じです。今考えれば、ライバルの集まりであるわけですが、それ以上に『仲間』だったですね。その中には（ノーベル賞の共同研究者である）小



ますかわ としひで

名古屋市生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士後期課程修了。京都大学などを経て、2003年より京都産業大学教授。2009年益川塾塾頭に就任。2010年より名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長も兼務。

林誠君との出会いもありました。

ただ発想のヒントというのは、研究室の中の議論で見つかるものではないのです。例えば仲間との帰り道での雑談、何気ない言葉のやり取りの中から、突然、閃くことがあるものです。

当時の私にとって大事なのは研究仲間と過ごす『日常』でした。生活の一場面一場面、こちらの言葉に見せた仲間の表情。毎日の断片の中に、研

究者として最も大切なものがありました。だから、不自由な言葉で不自由な日常が待ち受ける海外に行こうという気はありませんでした。

ただし、物理学に国境はありません。まして、業績を競う、論文を発表することは、世界中の研究者が相手です。自分がやるうとしていることは、世界で誰かがやっている。論文の発表が1日でも負ければ、もう業績にはなりません。日本から出たことは無くとも、いつもライバルは世界でした。

当時は国際的な論文集に載るのがまず大事です。同じ分野でどんな論文が出ているか、世界中の論文集を一人でチェックするわけにはいかない。だから仲間が必要。その仲間と、世界を相手に研究を続けることができたのは本当に幸せです。

最近ではインターネットが発達し、世界の最先端と研究室が直接つながるようになりました。ただ、ネットでは知識の整理はできても、閃きを得るのは難しいのではないかと私は思っています。

やはり、議論が大切です。例えば、若い研究者との議論を通して、自分の頭の中が攪拌される。そこで自分の思考が発展する。議論で疲れて、ご飯でも食べに行こうかとなって、その道すがらでまた議論となり、発見が生まれる。

ただ議論のためには、ある程度、共通した知識というか教養が必要になります。そのためにも教育は大切です。私自身、英語を目からでなく耳と口、ことにしゃべることから英語を学んでいけば、また違う議論ができたのと思うと少し残念です。

また、学びとは覚えることではありません。好奇心の継続です。一つの「なぜ」から次の「なぜ」が生まれ、それをどんどん深めていく。そのことを楽しいと感じ、世界ではどこまで進んでいるか、たえず好奇心を持つ。

実はそれこそが、『国際感覚』ではないでしょうか。世界のこと、あらゆることに興味と関心を持つ、その意味で、私は今回の『外交』誌に期待しています。

最近では若い人が新聞を読まず、世界のニュースに対する関心が薄いと言われます。世論が大事と言われる時代にあつて、その世論を形成する人々の社会への関心が弱まっているとしたら、危険なことではないかと私は危惧しています。

かつて、アインシュタイン博士を

中心に、世界の科学者が原水爆について
の共同宣言を行いました（1955年のラッセル・アインシュタイン宣言）。私は機会があつてあの宣言文を、なぜこの一言が別の場所ではなくここで使われているのかなど、隅々まで注意深く読みましたが、そこからくみ取れたのはアインシュタイン博士の地球滅亡に対する真剣な危機感でした。

今は市民運動も下火になりましたが、「自分はこういう生活をしたいと望んでいるのか」「そのためにはこの社会に対して自分は何ができるのか」ということを、まず生きる基盤に置いておかないといけない。それが無いと、国際的な議論などできません。

私は、現代の若い世代に非常に期待しています。私が学んできたよう

に、多くの研究者が意見交換できる学びの場として、京都産業大学で益川塾というものを始めています。世界中の研究者が集まってくれるのが夢ですが、物理にとどまることなく幅広い分野から人が集い、幅広い好奇心を伸ばしてほしいと思つています（注・益川塾には人文科学の分野もあります）。

若い世代と言えば、昨年、私は韓国と中国を訪れました。どちらも科学教育について意見を求められたのですが、韓国では「どうすればノーベル賞を取れる研究者が出てくるか」が話題の中心であり、中国では「科学者が自国で研究を続けられる環境の整備」についての意見を求められました。

両国とも、科学研究の大切さを理解していますから、これからは次々

と素晴らしい才能が出てくるでしょう。ただ話をしながら、私は別のことを考えていました。

それは、日本では明治時代に日本語で科学の専門分野の教科書を作っていた、ということでした。

これはすごいことです。専門用語の翻訳など、大変な作業です。ただ、先人のその努力があつたおかげで、私たちは日本語で物理を学べた。世界の科学を知ることができた。学びの裾野が広がったわけです。中国や韓国では今でもむづかしい、とのことでした。

私は、「世界に行かずとも、きちんとした情報の伝え手がいれば、その地域を知り、考えることはできる」と思ってきました。本誌から、素晴らしい伝え手が育つことを期待しています。